

旧友と辿った思い出の山旅

(天空を分かち稜線から槍ヶ岳へ)

三俣蓮華小屋で、恐怖の一晚の出来事一切を吐き出すように話して、保田君と僕はどうか落ち着いた気分となった。

それでもなお、野営地に戻ってテントを畳み朝食を済ませ清掃を済ます間、常に昨夜の訪問者の影におびえていたに違いない。

そしてこの朝、

当三俣蓮華小屋で、にわかには信じられないことがあった。

小屋の人に礼を云いながら出発しようとした僕らの前に、三、四人のパーティが一組やって来た。そこに一人、大学で仲の良い同級生の顔があった。

お互いの顔をまじまじと見て、びっくり！

聞けば、やや北方にあたる山上の桃源郷と呼ばれる雲の平（くものたいら・二、六〇〇^坪の台地）からやって来たという。まさに奇偶の出会いである。

実はこの同級生に誘われて、僕は昨夏初めて北アルプスにやって来た。その絶景にたちまち心を奪われ、今回の登山となったのだ。

その彼に、東西幅二五^キ南北長一〇〇^キの山岳地帯、広大な北アルプスで遭遇する！こんなこともあるのか、夢のような出来事であった。

そして昨夜来の話にびっくりする彼に構わず一部始終をすっかり話し終えた僕は、今度こそ晴れた気分に戻っていたが、安心したせいもあるが、寝不足で鉛のような身体になっていた。

なお、彼ら一行は一体それからどこを目指していたのか、当の彼と何十年も経った最近になって話題となるも、うやむやになって苦笑するばかりとなっている。（記憶って、そんなものである）

彼らを残して、保田君と僕は南方の槍ヶ岳を目指した。

双六岳（すぐろくだけ・二、八六〇^尺）、縦沢岳（もみさわだけ・二、七五五^尺）を経て、難易度が高い西鎌尾根に挑んで、憧れの槍ヶ岳（やりがたけ・三、一八〇^尺）へ向かうことになる。

ひたすら、たたなずく峰々の先に尖る槍の穂を目指した。幸い天候はすっかり回復し、窮地を脱した解放感に広大な山稜の開放感、絶好の山旅日和となっていた。

ここからは今回の山旅のクライマックスだ……

僕らが踏みしめる尾根は、時には花崗岩の岩稜地帯を縫い、時にはハイマツ帯に踏み入り、お花畑に癒され、ゆったりとうねりながら続いた。足元には花崗岩の風化した真砂が白い道を成し、清々しいばかりの大きに包まれて、僕らはそのふところの中に深々と溶け込んだ。そして行く道の先には、まあい双六岳、その先にはやや鋭角な山容の縦沢岳が右に左に大きくなって、その先に黒々と聳える尖がりが見え隠れする。

まさに天空を分かち稜線を、二人は蟻のごとく黙々と歩いた。

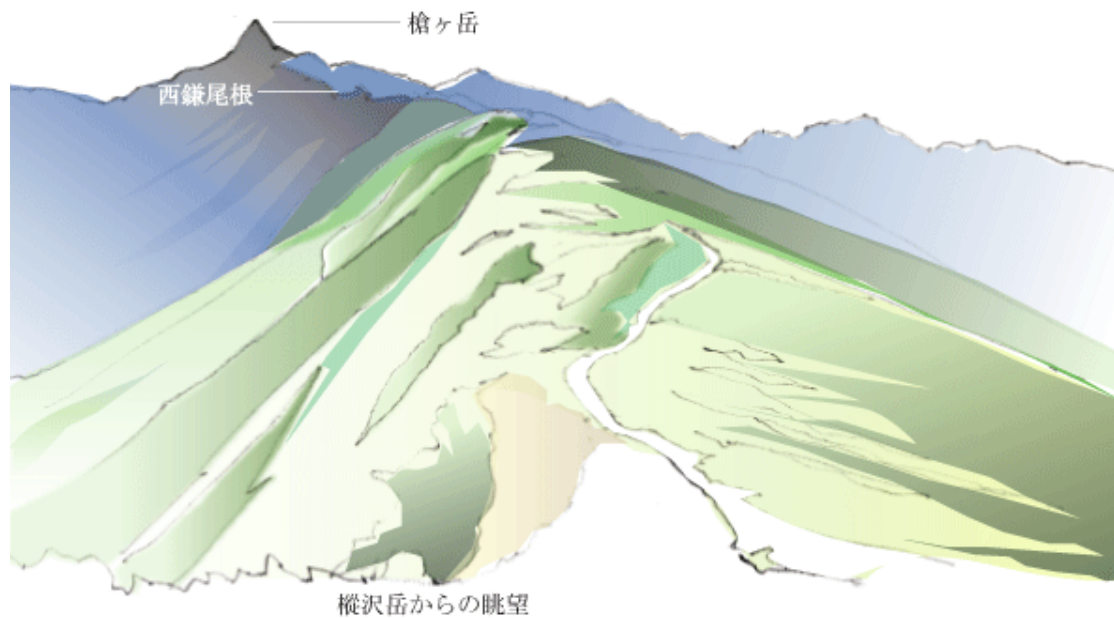
思えば、この山旅は諸事において常に誰かに引張られるように参加してきた行動と異なり、珍しく僕自身に主体性があった。

そもそもはフランス映画「アルピニスト岸壁に登る」という映画がきっかけで、昨夏の北ア前衛から一望した槍・穂高が決め手となったせいか能動的な自分になっていた。当時欧米で流行った登山ファッションを真似もした。この山旅でも流行りのツイードの背広を着込み、雄大に広がる稜線でさっそうと披露して、ひとり悦に入っていた。相棒の保田君にはどう見えただろう。

さて、足元は快調に歩を進めて、双六岳を右手に見ながら、なだらかな巻き道を選んで赤い屋根の双六小屋で一休み、間無しに縦沢

岳を急登した。

その頂きを登りきると、これからのルートがはっきりと展望できた。僕らが辿る尾根道の先には峻険な西鎌尾根、その先に黒々とした槍の穂先がそびえる。それを思い出して、スケッチした。



なお、野鳥の会の創設者・中西悟道さんは「山の表現者」とも云われるほど、山に親しみ野鳥や昆虫、草花などを観察しながら詩歌や紀行文を遺している。昭和十八年夏、その彼が三俣蓮華からやって来て双六小屋や樅沢岳で、見渡す限りの山容や天空の様子、イワツバメはじめ鳥類のさえずりや一面のイワギキョウなど高山植物を愛でる様子が野鳥記「雲表」に詳しく載っている。

同じコースを辿っていながら、僕には、中西さんのような風流な感性や観察眼、研究心を一縷も持ち合わせなかったが、せめてスケッチを描き添えて、同じような景色を見ていたんだらうと想像、少し寄り添えたような気分になった。

さて、僕らはいよいよ今回最難関の西鎌尾根を踏破する。

鎌尾根という通り、歩くルートの左右が鋭く切れ落ちるように急傾斜して谷に落ち込み、強風の時には左右どちらにも転落の危険性が大きいところで、ひと時も気が抜けない。重いザックを背にして、足元は高低差の激しい岩場の連続で、鎖場もある難所だ。

ところが保田君にしても僕にしても、この尾根渡りの行程は奇妙なほどに記憶がない。

思うに、この日二人とも大変な寝不足ときている。だから山に取り付いた初日に僕が経験したような油断があつてはならない。二人にとつて経験したことの無い集中力で臨んだに違いなく、結果ヒヤリとした危険な状態に陥らなかつた。だから脳裏には周囲の景色も無ければ、無事通り抜ける以外何ら印象に残らなかつたのだ。

そして遂に、僕ら二人が鉄梯子をよじ登って辿り着いた念願の槍ヶ岳山頂は、四畳半ほどの広さの岩場が空中に浮いていた。

(続く)